



秋も一段と深まり、山々が鮮やかに色づく季節となりました。秋は、落ち着いて読書や学習に取り組むことができる時期であり、歴史や自然にふれる絶好の季節でもあります。「いのちのたび博物館」では、秋の特別展「トイレのうんちく展」が始まっています。この秋、「博物館」で知的な好奇心を高めてみてはいかがでしょうか。

開館20周年記念 秋の特別展「トイレのうんちく展」

【開催期間】令和4年10月1日(土)～11月23日(水)

遺跡から発掘された古代のトイレから最新のトイレまで、トイレにまつわる様々な「うんちく」や歴史について、豊富な資料や模型で紹介する展覧会です。子どもから大人まで楽しく学ぶことができます。

染付便器



トイレについて楽しく学ぼうよ!

ぼくのうんちも見てよ!



江戸時代の公衆トイレ



2トンのジャンボロール
トイレトーパーのもととなるもの
(九州製紙提供)



徳川将軍の
小使用模型

(大田区立郷土博物館蔵)



常設展のみ

	一般	団体
大人	600円	480円
高・大生	360円	280円
小・中生	240円	190円

特別展のみ

	一般	団体
大人	500円	400円
高・大生	300円	240円
小・中生	250円	190円

セット券(常設展+特別展)

	一般	団体
大人	1000円	880円
高・大生	600円	520円
小・中生	430円	380円

※ 団体は30名以上のお一人様料金です。

企画展「折尾駅ものがたりー日本初の立体交差駅のあゆみー」

会期 令和4年9月10日(土)～12月11日(日)

※ 常設展入場券で観覧可(入館にはWeb予約が必要)

明治時代に日本初の立体交差駅として開業した折尾駅の歴史的役割や工夫、地域における意義、駅舎などを紹介しています。(旧折尾駅舎) →



ミュージアムのタネ



渡り鳥って、すごいね!

渡り鳥のふしぎ

夏に河原や商店街の軒下で見かけたツバメたちは、いつの間にかいなくなっていましたね。一方で、夏の間見かけなかったジョウビタキが、最近ではちらほらとみられるようになりました。こうした鳥たちは、いったいどこからやってくるのでしょうか?



ツバメやジョウビタキのような鳥たちは、大規模な季節移動を行います。例えば、ツバメは春から夏にかけて日本へやってきて子育てをした後、秋にはフィリピンなどへと移動していきます。冬を越した春になると、子育てをするために再び日本へと戻ってきます。一方、ジョウビタキは冬の間を日本で過ごしますが、そのほとんどは春になると中国東北部や極東ロシアへ移動して繁殖し、秋になるとまた日本へ戻ってきます。このような季節移動を「渡り」といい、渡りを行う鳥たちは「渡り鳥」と呼ばれています。鳥が渡りを行うには、食べ物の手に入れやすさや、すみやすさが関係していると言われています。例えば、春から夏の時期の日本にはツバメの食べ物である小さな飛ぶ昆虫がたくさんいますが、冬になるといなくなってしまう。しかしツバメは南にわたることで、一年中食べ物を得ることができるのです。同じようにジョウビタキは繁殖地の冬の厳しい環境を避けて、日本へ渡ってきます。渡りには、移動中に捕食される・力尽きるといったリスクも伴いますが、旅を乗り越えれば食べ物の豊富な住みよい場所にたどり着くことができるので、渡り鳥はリスクをとる代わりに大きな利益を得ていると言えるでしょう。



上:ツバメ 下:ジョウビタキ

渡りの経路をどう選ぶかは鳥たちの命にかかわる大きな問題です。私が研究しているノスリというタカは、冬に北九州の里山環境にやってくる渡り鳥のひとつです。特別な許可をとって冬の北九州で捕まえたノスリの背中にGPSロガーという機器を背負わせて渡りを追跡したところ、日本列島に沿って東日本(中部地方～北海道)まで渡っていることがわかりました。一方で、同じ福岡県の別の場所や長崎県から追跡したノスリの一部はユーラシア大陸へと渡り、極東ロシアまで



ノスリ



移動していました。一番遠くまで移動した個体は、マガダンというところまでなんと約4,200kmもの距離を渡っていました。注目すべきは、大陸に渡ったノスリと日本列島に沿って渡ったノスリの移動経路はおおよそ日本海の両岸に分かれていたということです。これは、ノスリにとって海上の長距離移動が困難であることを物語っています。

← ノスリの渡り経路

自然史課 学芸員 なかはら とおる 中原 亨